

■■■ 入管法改正とその問題点 ■■■

2009年に改正された入管法のうち、新しい在留制度については3年の準備期間を得て、2012年7月9日から施行されました。以下今回の改正の目的、改正の中身について説明していきたいと思えます。

1. 今回の改正の目的

今回の改正の目的は従来の在留管理制度は、入管法と外国人登録法の下に外国人の在留関係に関しては入管、居住等の関係は市町村に別れて2元管理されていたのを、入管局に一元的・継続的に把握させることにしたもので、そのため外国人登録制度が廃止されることになりました。また、従来外国人登録制度での申請義務違反と入管法上の処分が直接連動していないことから、これを改め、一元管理により所属機関・関係機関からの情報の正確な取得と義務違反に対する在留資格の取り消し等の処分とを連動させたということです。さらに、これまで非正規滞在者に対しても外国人登録証を交付していたのを、外国人登録制度を廃止したことにより、非正規滞在者にはその身分を証明する書類が交付されないことになり、非正規滞在者の在留を困難にする目的（あぶり出し）もあります。

2. 新しい在留管理制度について

(1) 在留カードの交付

外国人登録制度が廃止されたことにより、日本に在留している外国人に対しては新たに「在留カード」が交付されます。但し、全ての外国人に「在留カードが交付されるのではなく、以下の者は除外されます。

- ① 「3月」以下の在留資格
- ② 「短期滞在」の在留資格
- ③ 非正規滞在者
- ④ 特別永住者

これ以外の外国人、要するに1年以上の中・長期在留資格を有する者は全て「在留カード」が交付されるということになります。「在留カード」の有効期間はそれぞれの在留期間と連動しており、在留期間がくるごとに更新申請しなければなりません。一般の永住者については7年ごとに更新する必要があります。

(2) 在留期間が最長5年になります。

従来の外国人の在留期間の最長は3年とされていましたが、これが5年になります。

但し、今の3年の人自動的に5年になるというのではなく、この基準についてはまだ明確にされておらず、問題があるところです。永住権を申請する場合には最長の在留期間を有していることが要件とされていますが、3年の在留期間を有している者については最長期間として扱うこととされています。

(3) 再入国期間が最長5年になります。

在留期間の最長が5年とされたことから再入国期間が5年に伸張されています。但し、在留期間が5年を有していない人は、自分の有している在留期間内には再入国する必要があります。その他にみなし再入国許可制度というのが新設され、1年以内に再入国する場合には、一々入管にあって再入国許可を貰わなくとも、出国の際に1年以内に帰国することを申告すればよいことになりました。

3.特別永住者について

特別永住者には「在留カード」が交付されません。その代わり特別永住者証明書が交付されます。7年ごとに更新申請する必要があります。再入国期間が最長6年まで認められます。

4.住民票の作成

外国人登録制度が廃止され、外国人も住民票に記載されます。但し、中長期滞在者、特別永住者等に限り、不正規滞在者は住民登録されません。今後は、夫婦、子どもの国籍が別々であっても世帯ごとに住民票が作成されます。

5.入管法改正の問題点

今回の改正は、在留期間が最長5年、再入国期間が5年とされ、一定の利便を増した点がありますが、なんとといっても不正規滞在者が一切の登録が許されず、そのため就学児童を抱え公立学校に入学するときの通知はなく、個別に対応しなければならないこととなります。また、国民健康保険への加入も認められず、社会福祉が受けられず、人権が脅かされる事態が懸念されます。改正法施行後の運用の実態を注意深く注視していく必要があります。(KFC理事、弁護士、吉井 正明)

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆地域日本語教育における『生活日本語』学習の効果と新たな教室活動形態の提言

—KFCの生活日本語教育を事例として—

2011年8月よりKFCで神戸市の委託事業として生活日本語テキスト『なでしこジャパニーズ』の作成や生活日本語講師をさせて頂いた松本茜と申します。2011年度の貴重な体験を通し、地域日本語教育における「生活日本語」学習についてより知識を深めたい思い、2012年4月より京都外国語大学の大学院で研究をして参りました。

研究は、①KFCに通う「生活者としての外国人」に対する『なでしこジャパニーズ』を用いた「生活日本語」学習の効果と、②KFCが取り組む新たな教室活動形態「FSG」；1の効果について明らかにすることを目的としています。

研究①では、KFC生活日本語教室に通う2名の学習者に対し、『なでしこジャパニーズ』で「生活日本語」を学習する前と後で、どのような学習効果が得られたかを明らかにするための調査を行いました。調査方法としては、『なでしこジャパニーズ』に取り上げている日常生活の中で達成したい課題(タスク)をすべて取り出し、アンケートを作成、学習事前と事後でどのような変化が見られるかを観察するとともに、インタビュー調査を同時に実施しました。

その結果、1)生活に密着した実用的な日本語・生活知識を短期間で習得できた、2)生活に根ざした日本語や生活知識を学習したことで、生活行動範囲が広がった、3)災害や防災、事故や犯罪等について深く学習したことで、より安心で安全な生活へと繋がった、等といった効果が明らかになりました。

研究②では、「FSG」の活動形態をとる生活日本語教室に参加して下さったボランティア14名、学習者5名に対しインタビュー調査を行いました。その結果、ボランティアの方々にとって

「FSG」は、1) 日本語ボランティアの入口として負担が少なく始めやすい、2) 「F」や「S」から授業の進行の方法や教授法等のロールモデルを得ることができ、日本語ボランティアとして自信がついた、3) グループマンツーマン等、主体となって教えることへの向上心が生まれた、等の効果が明らかになりました。

また、学習者にとって「FSG」は、1) 人数が増え楽しい雰囲気の中で学習ができる、2) 多くの人の表現方法や知識、考え方を聞くことで、幅広い日本語や生活知識、価値観の習得に繋がった、3) 隣に支援者が座ることで質問しやすくなり、情意フィルターが下がる等といった効果が明らかになりました。

今後は、「生活日本語」や「FSG」をどのように普及していくか、生活環境が変化していく学習者に対して「生活日本語」をどのように変化させていくのか等の課題があるかと思えます。

最後になりましたが、研究をするにあたり本当に多くの方々にお世話になり、感謝の気持ちで一杯です。今後も日本語教育に携わる中で、少しでも恩返しができればと思っております。本当にありがとうございました。(松本 茜)

※1 「FSG」は、日本語教師有資格者がファシリテーター(F)となり、クラスの構成・進行を行い、日本語ボランティアである支援者(S)と学習者(G)とが隣同士で座り学習を進める形態です。「FSG」は、ファシリテーター(F)からの指示を基に、支援者(S)と学習者(G)とが「教える-教わる」という関係性ではなく、「生活者としての外国人」と「生活者としての日本人」として「対話」を通して様々な生活場面における日本語や生活知識を双方が学んでいくという「共同学習型」の活動形態です。

◆生活日本語テキスト「なでしこジャパニーズ」(L.13~L.24) 作成しました。[文化庁委託]

昨年度、KFCで生活日本語のテキスト(L. 1~L. 12)を完成させましたが、今年度は、その続きの課(L. 13~L. 24)を作ることができました。今回の目玉はその中の2課分のビデオ教材に挑戦したことです。

日本語の教科書では共通語の丁寧な文体から学習しますが、接する人はほとんど関西弁なので、「教科書で勉強する日本語と周りの日本語は違う」「教室での勉強は役に立たない」と思われてしまうことが時々あります。待遇表現を理解してもらえればいいのですが、その説明がわかるほど日本語力はまだついていません。そこで、始めは感覚だけでもいいので、相手(目上・友だちなど)によって語尾のことばが違うということ映像を見て捉えてほしいと今回、ビデオ教材作成に挑戦しました。出演メンバーはKFCのスタッフと日本語ボランティアの方、俳優業第一歩目です。現場の厳しい指導の下、プロと見間違ふほどの演技になっているはずですが、、、。

完成すれば文化庁に提出します。その後、KFCのHPでも見られるようにするかリンクをはらせてもらう予定です。(奥 優伽子)

◆神戸弁でのビデオ教材撮影現場

2月16日(土)の朝、KFC事務所の一角で撮影が執り行われました。撮影担当はFMわいわいの村上さん。村上さんはディレクターを兼ねます。それから撮影助手の田村さん。出演者は日本語ボランティアの中川さん、中山さんと、KFCの呼和徳力根さん。

撮影内容は事務所内での会話です。セリフは、私の記憶する限り大体次の通りです。「今度、東京から兄が来んねん。どっかええとこない?」「神戸は初めてなん? 初めてやったら、異人館とか中国人街がお勧めやでえ。」「兄はアニメが好きやねん。フィギュア置いてると

こが三宮にあるて聞いたんやけど・・・」 「ああ、それ知っとお知っとお、センター街にあるわ。アニメの好きな人でいっつも一杯やわ。」

たったこれだけの会話なのですが、素人の出演者とともにこれをちゃんとしたドラマにするのは大変なことなのでしょう。ディレクターは出演者のセリフ回しや演技に注文を入れて、やり直しを連発します。数えきれないほどの撮り直しのあと、一応の撮影が終わるまでに一時間以上を要しました。

以上、撮影現場からのレポートでした。(ニュース係 操田 誠)

■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

◆ K F C の学習支援に関わって

外国にルーツを持つ子どもは、日本語が苦手、という面が強いです。最近日本に来た子どものこのような負担感はずぐにわかります。周りにいるみんなの言葉がわからないから、それだけで不安になります。このような子どもへの学習支援は、学校でも母語での支援が何時間かありますが、放課後に1対1で支援することも必要です。また、同じような立場の人がいる、ということも安心して学習できます。

日本で生まれた子どもの場合、言葉は大丈夫だから問題ない、と思われがちです。でも、教室で見ていると、やはり学習に必要な言葉と知識が十分ではない場合や、学習習慣が身につけにくいことも多いと感じます。文章を書くことが苦手、という子も多いです。また、社会科や国語の読解など、日本人ならなんとなく知っている部分がわかりにくいこともあります。家での会話では身につけにくい事柄です。それでも、教室に来ている子どもは、毎週来ることで、少しずつ言葉の力も算数の力もついてきています。私たちも今、弱い点はどこかな、と見て、それをワークブックや国語辞典などいろいろ使って少しでも力を伸ばしたい、と思っています。また、家庭的な事情もあって、学習に集中できない子もいます。学校でも学習していることがわからないから、集中できないことも多いです。少しでも自信がつくように、少しでもできていることやできてきた事は褒めながら落ち着いて学習するように気をつけています。教室が騒然とすると、ますます落ち着いて学習できません。ちょっと落ち着いて学習できるようになった子やテストの点数が上がった、と持ってきている子がいると元気がでます。

K F C では、ベトナム、フィリピン、中国の子たちが来ています。子どもが日本に慣れて、言葉を覚えていくのは早いなあと適応力の素晴らしさに感心させられます。ただ、慣れるまでの学校での取り組みや、K F C での丁寧な指導が必要です。もう一つ K F C の良さは、ここに来ると同じ国の子どもがいて、その国の言葉も話せるという安心感を味わえること、また、時々来てくれる先輩というモデルもあります。これは大きいなあと思います。

中学生の教室を見ていると、今、高校受験の季節なのでよけいかもしれませんが、真剣に学習しています。嬉しいニュースも知らされ、私もほっとしたり、元気をもらったりしています。

小学校入学前プレスクールも始まっていますが、少しでも早く学習支援できると、学校にもなじみやすく学習に取り組みやすくなると思うのでぜひ続けてほしいです。

4月から中央区の賀川記念館でも、外国にルーツを持つ子どもの学習支援が始まり、プレスクールが既に始まっています。ボランティアは経験豊かな方がおられると落ち着いて学習できるようになってありがたいですが、学生ボランティア・スタッフは、子どもにとって素敵なお兄さんお姉さんで、楽しみながら学習できるよさも大きいです。いろいろな人の力で子どもの成長を支えていきたいな、と思います。 (小城 智子)

*3月2日から賀川記念館の学習教室「はいず」での就学前の子どもを対象としたプレスクールが

始まっています。

4歳から6歳までの、中国、ベトナム、アフガニスタンにルーツを持つ子ども6人とそのお姉さん(小学3年生) 1名が参加しています。まだ全然日本語がわからない子どもが多いですが、みな熱心に学習しています。

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆二つの柱で太極拳交流を！

帰国者交流会で皆さんと太極拳を始めてから早3年目の春を迎えました。

この間、参加者の皆さんには大変お世話になりまして有難うございました。

交流会も当初からすると参加者の新しい顔ぶれも増え、内容も歌あり、将棋あり、卓球あり、ヤンコあり、太極拳ありとバラエティ豊かな充実した会になってきた感じがします。

中でも太極拳の方は大勢の方が熱心に練習され、今では練功はもとより、24式太極拳を十分に演武出来るまでに上達してこられました。更に太極拳にもチャレンジされる方も出てこられ、太極拳のバラエティも一層広がってきた感じがします。

「石の上にも3年」といいますが、今年は交流会太極拳も3年目に入ります。今までの努力の成果をふまえ、今年は二つの柱で一層充実した交流会活動になるようにしていきたいと思えます。

一つの柱は皆さんの中から多くの太極拳のリーダーが育ってもらうことです。皆さん大変上達してこられました。太極拳を習う側から、新しい方に教える側になれるよう自信を持って頑張ってもらいたいと思えます。

二つ目の柱は、今までの実績をふまえ、皆さんの練習の成果を発表出来る機会を持ちたいと思えます。幸い11月に神戸市立地域人材支援センターの文化祭が開かれる予定ですので、ここで皆さんの上達した太極拳の演武を大勢の来場の方々にご披露したいと思えます。きっと来場の方々も素晴らし演武に感心されることと思えます。

今年はこのような目標を持って頑張って練習していきましょう。

太極拳は「武術」であると同時に優れた「健康術」であること。また「動く言葉」とも「動く親善大使」ともいわれています。

太極拳は一人一人の心身の健康づくりに大変効果がありますが、更に大勢の人たちと一緒に音楽にのり、表演したり交流したりすることで一層楽しく、仲間づくりや友達づくりにも大いに役立つものです。

さあ、今年も皆さん太極拳に更に磨きをかけ、太極拳を通じて健康で明るく楽しい充実した人生の日々を過ごしていきましょう。(神戸市シルバーカレッジ国際友の会 秋山 義治)

■■■ ハナの会 ■■■

◆KFC帰国者新長田交流会ハイキング

KFC帰国者新長田交流会の特別行事として、2月12日(火)の午後に、ハイキングが実施されました。ルートは、南京町～神戸華僑歴史博物館～戦没した船と会員の資料館～南京町で、50名のたくさんの方が参加され、和気あいあいと半日のハイキングを楽しみました。集合場所は、中華街の真ん中の南京町広場でしたが、この日は中国の春節祭(2月10日から15日)の期間中に当たり、平日ではありましたがたくさんの方が観光に来ていました。まず、南京町春節祭の催しの獅子舞、龍の舞を見学しましたが、あまりに見学の人が多く、後ろの方から背伸びしながらやっと見えるという状態でした。また、まわりの出店で立ち食いを楽しんでいるメンバー

もたくさんいました。

次に、神戸中華総商会ビルの2階にある神戸華僑歴史博物館へ行きました。1868年の兵庫（神戸）港開港以来の神戸の地域史が華僑華人の視点で紹介されています。三把刀（三種類の刃物：中華料理、洋服仕立て、理髪）だけでなく、印刷製本・ペンキ塗装・靴製造修理・マッチ製造・輸出入貨物の検数などさまざまな仕事や技術を通じて経済的な基盤を広げる一方、神戸の人々との交流を深めていった歴史の貴重な資料を見学しました。

次に、近くにある全日本海員組合の「戦没した船と会員の資料館」に行きました。昭和16年から20年までの戦争中に沈没した民間の船の写真と船名が展示されていました。確認できている沈没した民間の船の数は約6000船ですが、実際に沈没した船の数はその数倍とのことで、沈没した軍艦よりずっと多い数です。戦争に関わるということということで、色々と質問されている方もいました。

その後、再び南京町の広場に戻り、交流会のメンバーも練習を続けている太極拳の模範演技を見学しました。いつも練習している24式、剣舞・扇を使った舞が披露されていました。そのまま、現地解散ということで3時すぎに散会しました。

久しぶりに帰国者新長田交流会の催しに参加しましたが、メンバーの数も増加しており、確実に発展していることが感じられました。（ニュース係 川淵 啓司）

◆ネツソニヤツソニラー

ハナの会では、昨年の秋から月一度整体師チョンシニさんのマッサージが始まりました。利用者さんらには大変人気で、家族さんから「介護保険で利用できるなら母のため、その整体師の兄さんを家に来てもらいたい」という相談も頂きました。以下チョンシニさんの書いた「ネツソニヤツソニラー」を紹介させていただきます。

「人の身体を癒す時には『ネツソニヤツソニラー』って心で思いながらやさしく触るんよ」と母に教えてもらいました。韓国語で『私の手は薬の手』という意味です。

月に一回、整体をするためにハナの会に行かせてもらっています。幼少期に祖父母を亡くし、日本の学校を出た私には、一世の記憶はほとんどありません。

両親から聞く一世の歴史は、気高く、強く、人間性にあふれた存在であり、私にとっては憧れの存在でした。一世のために何かしたいという気持ちは常にありましたが、整体という形で触れ合えるとは思っていませんでした。

KEY（在日コリアン青年連合）の代表であるカンファンボム氏に連れて行ってもらった初日の事はあまりにも印象的でした。食事中に一人のハンメ（おばあちゃん）が怒りだしたのです。韓国語と日本語が入り混じって何を言っているのかわからないが、その露骨に剥きだされた怒りにおののきました。フフさんが「この方の言っていることをよく聞くと日本に来た当初日本語が分からなくて、『日本語をはっきりしゃべれ』と怒られていたことをずっと言っていますよ。」と怒りの内容を説明してもらいました。ハンメは見知らぬ男性が入って来たことにより、差別されてきた記憶がフラッシュバックしたのだろう。戦争という理不尽な環境から生み出された「怒り」だと納得しました。

帰りの電車の中で戦争の終わりとは一体何だろうかと、感傷に浸る自分がいた。終戦記念日、韓国では解放記念日。記念日として区切りは付けられたのだろうが、戦争の傷は互いに決して癒えることは無いと改めて体感しました。

本当の平和とは、国家の歴史では無く、血肉の通った自分自身の歴史を内証した上で、平和とは何かと個人の課題として考え続けることです。

戦争に終わりはないと自覚したその日から、自分の中である種の解放が始まりました。

ただ平凡な日常を生きる、ということ自体が困難になりつつある世界で『ネッソニヤッソニラ』と単純に思いを込めて人と出会って行く生き方も悪く無いと思えました。平凡な日常を奪うものに対して無関心ではられない自分がいます。(チョンシニ)

■■■ グループホーム ハナ■■■

◆雑感

『多文化共生』のテーマを掲げ、KFCではデイサービスにグループホームと介護の分野で日々スタッフの『多文化共生』の具現化の挑戦が続いています。

『多文化共生』の理念はすばらしいが、この事が当たり前の事として発揮できる社会になるには長い時間を要することでしょう。

困難ではあるが、このすばらしいテーマの実践を積み重ねる事が、私たちKFC介護職員の課題だと自覚するものです。

グループホームでいえば、今年の7月より18人の高齢者が一つの屋根の下で生活を始めるようになった。韓国人、中国系ベトナム難民、そして日本人。差別の時代を生き抜いてきた世代です。言葉にこそ出てこないが、差別感情はあると思います。(肯定しているわけではありません)

グループホームを開設して数カ月経った頃、ある在日のスタッフが嬉しそうに私に語ってくれた事があります。「このフロアの女性の利用者が一堂に集まって会話に花が咲いていたのを初めて見ました。あのおばあちゃんもその会話に入っておられたんですよ」と。構成は日本人2名に韓国人2名。そのおばあちゃんは日本人です。いつも男性利用者とは囲碁をして遊んでいたが遠目に見ていたのだろう。距離が狭まってよかったです。

職員でいえば在日韓国人と日本人が半々、そこにベトナム、中国、ペルー出身のスタッフ構成です。

専門用語が分からないだけでなく、日常用語が理解できない中での、チームを組んでの仕事なので、コミュニケーションにも齟齬が生まれてくるのがしばしばありました。

在日韓国人のスタッフは親子、姉妹、いとこ同士と濃い関係が集まった事に加え、日本の組織には見られない身内意識があり、最初の頃はその濃さに入りきれないで戸惑う職員も少くはありませんでした。

『多文化共生』の精神は多民族の多文化の前に、人権です。自分と違う(個性、価値観を含めて)他人を認められるコミュニケーションのセンスです。同じ価値観以外は受け入れないと言う

『排他性』の克服も課題の一つです。

開設以来スタッフが辞めない事が、辞めさせない事がグループホームハナ1年目の『多文化共生』の実践の一つだと考えて1周年を目指しています。(グループホーム ハナ施設長 山根 香代子)

■■■ 今後の予定■■■

■就学前の子どもプレスクール「はいず」

3月2日(土)～3月23日(土)

於 賀川記念館

■KFCの子ども平和学習ウォーク

4月2日(火)

於 兵庫区エリア

■ **福島の子どもの一時保養事業**

3月25日～3月30日 於 しあわせの村

■ **KFC帰国者新長田交流会**

京都へ遠足（京都の帰国者との交流とバス旅行）

3月24日(日) 9：30～